

# もっと知りたい ふるさと

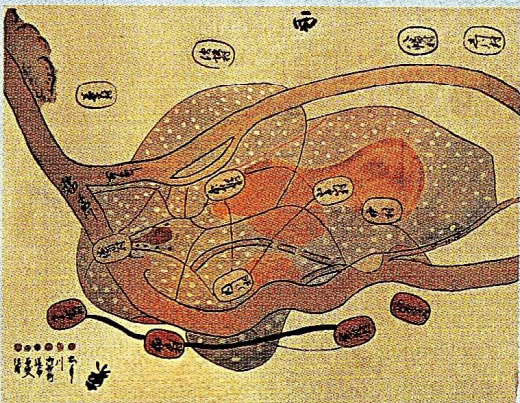
26

## いぬ まんすい 「戌の満水」から思うこと

大震災や水害に加え、火山の噴火等最近の地球環境は、「想定外」で済まされない時代である。

昨年(三・一一)の災害を機に、「戸倉史談会」では、地元の災害文書を読み解く中で、寛保二年(一七四二)の大水害「戌の満水」に触れ、大河千曲川が生活に与える影響力の強さを再認識したところである。

近世最大級の「戌の満水」は、秋雨前線と台風の通過が重なり、中部・関東地方に大被害を与えた。当地でも、旧暦七月二十七日から降り出した雨は八月一日まで降り続き、千曲川流域全域に大洪水をもたらした。洪水だけでなく山崩れも多発した。当時の松代藩領内で九百件以上の山崩れが発生した記録が見られる。今回読み解いた文書にも、更級地区に山崩れの記録が残っている。被害状況は、各地に伝承や文書、慰霊碑等で伝えられており、中野市立ヶ花水位観測点付近の水位は、一一メートル上昇し、流域の死者二千八百人前後といわれている。



堤防決壊被害絵図

戸倉地域では、上戸倉の堤防が決壊、加えて、八王子の「獅子が鼻」に当り蛇行した千曲川

本流は、現在の戸倉上山田中学校の辺りで堤防を突き破り、上徳間・内川の地域の住居・田畑の大半を押し流した。徳間村で六五人、内川村四九人、千本柳村二人が亡くなっている。また、下流の岩野では一八〇名と記録されている。流された家も多く、上徳間の村山氏所蔵文書には、「当八月中満水に付き流れ家五八軒」とある。個人別書上記録には、居宅・物置・灰屋・土蔵が全て流失の記載があり、私財

全てを失った家族も多い事がわかる。

これらの被災した人々には、二ヶ月後には家を建てる材木が藩のご用林から切り出され提供されている。多くの田畑は、千曲川の川筋となり耕作出来ない状態となった。水害の翌年には、代官所からそれらの荒地に、藩の重要産物である漆の苗木を植え付けるお触れが出されたようである。それに対する、このような文書も残されている。「当村の儀、去年中満水にて残らず川欠罷り成り、植付申べき所御座無く候、この末砂入り等の場所、何分にも切起し、御田地に致したく……」と、代官所に訴えている。その後三〇年以上かかって元の収穫量に戻している。

現在の津波災害を顧みても、今の居住環境は、過去のどのような場所だったのかを振り返っておくことも有意義なことである。千曲川治水の歴史は古く、慶長年間(一六〇〇年代初め)松平忠輝の統治時代に、戸倉地域に高さ二間長さ千間の土手が築かれたとある。その後も幕府や

藩による治水工事が継続されていくことになるが、川筋が現在の堤防内に固定されたのは最近のことである。近世までは、東西の山並みの間を洪水の都度流路を変えていた。この事は、農地が整備される前、まだ家数も少ない昭和二十二年に撮影された戸倉地区の空中写真に、その流路変遷と自然堤防を利用した集落の姿を見ることが出来る。



空中写真(1947年撮影)

現在は、防災技術も進み、千曲川の堤防も当時の霞堤から連続した格段強固な、信頼のおけるものになっているが、過去を知り、不測の事態に対応できる心構えが必要な時代であると思ふところである。

資料提供 村山汎亨氏 他

戸倉史談会 北村 主計